の未開形態」をその端緒と考えていたことがあった。しかしそれは誤りである。それを訂正するためと、Pickerling の論文に答えるため本稿を執筆したが、デュルケームの論議の中にはかつてベラーが評したように用語が余りにも多義的に用いられているため、一見問題の所在がつかみにくい点が多い。Pickerling にしても分類論[93]と「宗教生活しか直接には扱われていないし、彼が指摘するようにデュルケームには一つの型の論議から他への流動が多いことは事実であるし、その他の指摘の当っている所は多い。それは事実であるが、G. Namer がのべているようにまた G. Davy の指摘のように、知識は彼の研究の全生涯に亘って頭からぬぐい去ることのできなかった問題なのである。だからもっと視野を広くして、社会学の全体のプランをにらみ合わせて研究され直すべきであろう。これは彼の道徳論についても妥当する所である。デュルケームは1906年頃から社会学の対象である社会について、espèce 種として社会から文明へ civilisation へと重点を移そうとしていることも想起されるべきであり、彼の社会学にはそうした点か今日文化人類学において取り扱われるような問題へと関心の拡大が見られる。デュルケームと緊密な協力をおしまなかったモースにはそうした方向はたとえばその遺稿集が「人類学と社会学 Anthropologiè et sociologie」と名付けられていることも推知できる。そうした視野の下にこの問題は考察されるべきことを示唆している。本稿もそういう観点からの初の試みであり、今後ともこの研究方向は深められるべきものと思っている。

論文

1. W. S. F. Pickerling, 'The origins of conceptual thinking in Durkheim ; Social or relègious? (著作 2)
2. Gérard Namer, 'La Sociologie de la connaissance chez Durkheim et chez durkheimiens in *Année Sociologique.* 1977 (28) pp. 41–77
3. Emile Durkheim, 'De quelques formes priuitices de classification' in *Anée Sociologique* VI (1901–1902)、邦訳「分類の未開形態」
4. H.Hubert et M. Mauss, 'La représentation du temps. dans la neligion et la magie *Année Sociologique* V (1900–1901)
5. E. Durkheim, *Les formes élémentaircs de la vie enligieuse.* (1912、引用書は1968年版) 略「宗教生活」
6. E. Durkheim, *Les Rigles de la mélteode sociologique*
7. E. Durkheim, *De la division du travel social*
8. E. Durkheim, *Le Suicide*
9. E. Durkheim, *Pragmatisme el sociologie* (1953)
10. E. Durkheim, *Leçons de sociologie*
11. M. Mauss, Essai sur les variations saisonnieres des societes Esquimos *Année Sociologique,* X (1906)
12. Bellah, Introduction to *Durkheim, On Morality and Society* (1973)

93) 分類の未開形態の略

94) Bellah, Introduction to *Durkheim, On Morality and Society* (1993)